○○してみました世界のフィールド

「沙漠の船」の乗り心地

西尾 哲夫（にしお てつお）　民博 民族社会研究部

写真：調査で初めて乗ったころのへっぴり腰姿。今はもっとうまく乗れる！

ラクダは乾燥地域に暮らす人びとの生活に欠かせない家畜である。
モータリゼーションが世界中を席巻したとしても、
沙漠を行くための乗り物としてラクダは現役である。

最高にカッコいい登場シーン

茫漠（ぼうばく）とした果てしない地平線から黒づくめのベドウィンがあらわれ、リズミカルなラクダの足音とともに一直線にこちらに向かってくる……。映画「アラビアのロレンス」でベドウィンの若き族長を演じたエジプトの名優オマー・シャリフが、初めて画面にあらわれるシーンだ。この場面は、映画史上、最高にカッコいい登場シーンともいわれている。

現代のベドウィンが移動に使っているのは、ラクダではなくて大型の四輪駆動車だ。だが、沙漠での調査にラクダは欠かせない。シナイ半島を踏査したおりにも、ラクダに乗ってキャラバンさながらの毎日をすごした。沙漠をフィールドにしている言語学者は、オマー・シャリフと同じくらい上手にラクダに乗ることができるのだ。ただしそれは、ラクダを馬のように操ることができる、という意味ではない。

オマー・シャリフ登場シーンのラクダは走っているわけではない。このラクダはキャンター（駆け足）よりもゆったりした歩様（ほよう）で動いている。馬術でいう「トロット（速歩）」だ。トロットをしている馬に初心者が乗るのはかなりつらい。馬が一歩進むたびに反動で尻がはねあげられ、そのままドスンと鞍に落ちる。痔主（じぬし）だったら大変なことになる。馬のトロットでは、左（右）の前脚と右（左）の後脚が同時に前に出るため、背中が上下に動くからだ。騎手には、この上下動をうまく逃がすテクニックが要求される。一方、ラクダの場合だと、同じ側の前脚と後脚が同時に前に出る。つまり騎手に伝わるのは上下ではなく前後の揺れになる。というわけで、少し慣れればゆったりと歩くラクダに揺られて沙漠を旅するのは、それなりに楽だ。

「おれたちはみんなアラブ」

とはいっても調査には予想外のトラブルがつきものだ。シナイ半島の南にある港町トゥールからモーセが十戒をさずかったとされる山の麓にある聖カトリーヌ修道院に通じる古い巡礼路を探査していたときのこと。巡礼路には涸（か）れ谷のワーディ・ヘブラーンという難所がある。わたしたちは二〇頭ほどのラクダとラクダ引きをムゼイナ部族から借りていたのだが、ワーディ・ヘブラーンをしきっているのはアウラード・サイード部族だった。

ワーディ・ヘブラーンの入り口にさしかかると、案の定、アウラード・サイードの人びとが集まっている。ここは自分たちがしきっているから、自分たちからラクダとラクダ引きを調達するのが筋だという。もちろんムゼイナ部族も負けてはいない。双方が一歩もゆずらず、丁々発止のやりとりが始まってしまった。

このまま日が暮れるのではないかと思いはじめたとき、同行していた発掘隊の親方が仲裁に入ってくれたのでワーディを通過することができた。親方の話を聞いていた同僚によると、親方はこう言ったらしい。「自分は上エジプト出身のよそものだが、俺たちはみんな同じアラブじゃないか。よそからやって来た日本人の前でみっともない口論はやめよう」。

ついでに書いておくと、慣れない人がアラビアのロレンスを気取って全速力で沙漠を駆けるのはやめた方がいいだろう。ラクダレースの様子を見てもわかるように、本気のラクダは競馬の馬と同じように宙を飛ぶような走り方をする。時速五〇キロは出るらしい。ちなみにわたしはラクダを走らせたことは一度もない。

今ではほとんどが観光用ラクダ。（聖カトリーヌ修道院近くで撮影）

世話になっている部族長と彼のラクダ。むかしはラクダはステータスシンボルだった

エジプト・シナイ半島

サウジアラビアのリヤドで開催されたラクダレースで、ゴールインしたジョッキーに順位札が手渡されるところ
（2003年12月17日、撮影・縄田浩志）